
火魅子伝～黄龍戦記～

零月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火魅子伝〜黄龍戦記〜

【Nコード】

N2174B

【作者名】

零月

【あらすじ】

大切な人を護り切れなかった黄龍の拳士、陰陽の剣鬼にして剣聖たる剣士、神たる獣を宿せし忍…。三人の《魔人》達が友人達に遺跡発掘現場に誘われた時、それが大きな冒険の小さな序奏曲となる。
フレイユード

序章『卑弥呼』

日本、九州地方佐賀県、住宅地の道路を五人の男女が歩いていた。男四人に対して女一人と言う組み合わせで、男の方も三人は私服で内二人は竹刀袋を持ち、一人は制服と統一性の無い物だった

「〜」

私服で歩いている三人の中の一人、リュックを背負いながら楽しそうに鼻歌を歌っている青年『緋勇 龍牙』、彼の後ろを歩く、リュックの他に竹刀袋を持つ、他の二人の青年『御剣 零斗』と『荒谷 亨夜』はそんな彼に呆れたような口調で話しかける

「龍牙…何で遺跡の発掘をそんなに面白そうにするんだ？」

「…同感…オレはそんな昔の事には、興味ない。」

二人に視線を向けると龍牙は笑みを浮かべて、口を開く

「『邪馬台国』は『緋勇』や『九角』の名に関わりが深いんでね…」

そこまで言い切ると、龍牙は言葉を止めて語法を変え、言葉が続ける。

《実際、義兄さん達の最初の戦いに深く関わった、鬼道を作り出したのは、その女王『卑弥呼』で、『器』だったらいいからね。》

三人を案内するために前を歩く二人の男女 - 男が『九峪 雅比古』

で女が『姫島 日魅子』である。に聞えない様に配慮して、意識した相手のみにしか聞き取れない、例え聞き取れたとしても言葉としては認識出来ない様に《氣》を言葉に乗せた特殊な会話方法を使い、二人に向かって喋る。

卑弥呼に端を発する《鬼道》という呪法、卑弥呼の時代の後の千数百年後の徳川の時代、失われたはずのその呪法を蘇らせた男『九角 鬼修』、その男に端を発する戦い。そして、歴史を越え、幕末から現代まで受けつがれ、その戦いは彼の義兄『緋勇 龍麻』とその仲間達により、この時代に決着を付けた。間接的には言え、『邪馬台国』は『緋勇』の名を継ぐ、龍牙には関わりのある名前なのだ。

《…そう言えば確かに、九角家が蘇らせた鬼道は元々邪馬台国で誕生した物…だったな。》

同じ様に《氣》を乗せた、彼等《力》持つ者《魔人》達にとって、専用の通信回線とも言える方法で零斗が龍牙の言葉に納得した様に答えると。

《色々な意味で直接では無いにしても、大きく関わっている国と言っわけか…あの戦いの関係者である、オレ達にとっては…。》

龍牙の言葉にそう答えると、亨夜は前を歩く九峪と日魅子に視線を向ける。

《…しかし、この語法を使っていると言っても、陰のモノとの戦いには関係の無い、それも、何の力も持たない人間が二人もいるのに、話す事じゃないだろう…。》

世の中には関わってはいけない、関わってしまった場合、二度と後

戻りが出来ない世界の存在を知っている身の上としては、平和に生きる二人を巻き込みたくないと言う、亨夜の考えに納得しながら、龍牙は言葉を返す。

《そうだね。この話はこの辺で止めにしよう。》

その一言で会話が終った時、彼等の目的地が見えてきた。

「見えてきたね、目的地… 耶牟原遺跡。」

耶牟原遺跡の責任者である姫島教授は、予定通りに発掘調査が進んでいるのに大いに満足していた。大学のスタッフや現地のボランティアの人達に笑顔を振り撒きながら、遺跡を歩いていた。

その時、彼を呼ぶ声が遠くから聞えてきた

「おじいちゃん！」

「やれやれ、曰魅子か。」

教授は振り返り、自分の元に走ってくる孫の曰魅子を見てそう呟く。

日魅子は教授の前で息を整え、顔を上げてにっこりと笑う。

「なんだ、日魅子、そんなに慌てて？」

「あのね、向こうで大学のスタッフの人達が呼んでたよ。」

日魅子は来た方向を指差しながら、興奮した様子で言った。

「呼んでた？ わしをか？」

「おい。」

丘の向こうから二つの人影、手を上げた九峪と龍牙が近づいてくる。

「初めまして、本日は無理を言って、九峪君に連れて来て頂いた、
『緋勇 龍牙』です。」

龍牙は教授の前まで行くと優雅な動作で一礼をして、自己紹介をした後、後ろで勝手に見学をしている二人を指差す。

「後の二人はオレの友人で『御剣 零斗』と『荒谷 亨夜』です。」

「そうか、では、ゆっくり見学していつてくれ。それで… いったいどうしたんだ？」

「見た事の無い模様と形をした銅鏡が出たそうです。」

龍牙の自己紹介が終わるのを見て、九峪はまだ興奮している、日魅子に変わって言う。

「見た事の無い銅鏡!？」

教授の目が輝いていた。それがもし、卑弥呼に繋がる銅鏡ならば、それが邪馬台国にも繋がる可能性が有るのだ。

「よし、とにかく、行こう!」

「あ、教授。」

いきなり駆け出した教授に九峪は慌てたが、教授は肝心な事を聞いていない事に気がついて、すぐに急停止して振り返った。

「で? どこだつて?」

「あつち、あつち!」

日魅子が先導するように駆け出すと、すぐに二人の背が遠ざかって行く。

「...やれやれ...」

龍牙と九峪の二人は声をそろえて呟いた。

「親娘だねえ。」

「正確には祖父と孫だよ、九峪君。」

二人は我関せずと言った感じで周囲を見渡した。広い遺跡の中には発掘作業を続ける人々を見る事が出来る。

耶牟原遺跡は線路や道路から離れている為に何かが通る際に起こる騒音も無い、ただ聞えるのは鳥の声だけ…眠りに誘われるような、のんびりとした風情だった。

「のどかだねえ。」

九峪がそう呟くと九峪と龍牙は日魅子と教授が走り去った方へゆつくりと歩き出した。

「昔、この遺跡にいた人達も、こんなのかな風景を見ながら暮らしてたのかねえ…」

「多分、違っだろうな…。そんな余裕は無かった、こんな美しく、のどかな景色を楽しむ余裕も無い…戦乱の時代だった…オレはそう思う。」

九峪の言葉を否定する龍牙の表情はどこか悲しげだった…。

龍牙がそう言った瞬間、何故か馬の嘶きが聞えた、その他にも現代の日本では多くの人が聞く事の無い音でありながら、龍牙には聞きなれた音を聞いた。

喚声……。そして叫喚……。剣撃の音、それに続いて肉を断ち切る不快な音が……。絶叫が響く。

龍牙は思わず立ち止まり、周りを見回したが遺跡の発掘作業に精を出している人の姿が見えるだけで、音の出所はどこにも無い。

「…今のは…空耳か…？ それとも、この土地の記憶？」

「どうした？」

「イヤ、なんでもない。多分、気のせいだ。」

龍牙の言葉に九峪は首を捻りながら、再び歩き出した。

「さっきの呟きの答え…か。時が変わっても人のする事は変わらない…。今は祈ろう…。安らかな眠りを…。」

そう呟き、龍牙は再び歩き出した。同じ頃、亨夜と零斗の二人も同じ音を聞いた事を龍牙は知らない。そして、三人は知らない、それが彼らの大きな冒険の前の小さな前奏曲^{プレリュード}で有った事を…。

耶牟原遺跡の一角にプレハブ造りの建物が建ってる。発掘で出てきた物を一次的に保管しておくための物だ。夜八時を回り、発掘スタッフもいなくなったくらい遺跡の中を懐中電灯の灯りがそのプレハブに近付いてくる。

「なあ、日魅子、ほんとにいいのかよ？ 勝手に入って先生に怒られてもしらねえぞ。」

「同感、何でこんな夜中に？ 明日頼んで見せてもらえばいいと思うけど。」

「ちょっと待て、強制的にお前に引きずられてきた、オレ達の立場

はどうなる？」

「…三人とも、もう少し静かにした方がいい…外に人が居たら、気付かれる。」

上から、九峪、龍牙、亨夜、零斗の順番である、以外に乗り気な零斗であつた。懐中電灯を持つ日魅子を先頭にした五人は建物の入口の前まで来るとその場で立ち止まつた。

「九峪、彼女、様子が变だけど…いつから、あんな風に？」

（何時だ？ …朝でもない昼でもない…！！）

龍牙の問いの答えを見つけると九峪は龍牙の方を向く。

「…銅鏡…あの不思議な形の銅鏡、あれを見てからだ。」

「あれを見てから？」

「ああ…。つたく、どうしたんだか…。」

（変だな…確かにあの銅鏡からは、妙な《氣》は感じたけど、それ自体は無害な物だつたはずだし、人に危害を加えるような物じゃ無かつたはず。）

龍牙は自身の持つリュックに視線を向ける、亨夜と零斗の二人も同じ様に荷物と竹刀袋を持っていた

（…《備えあれば憂いなし》と言つた所だな…。何が出てきても、大抵の場合は切り抜けられそうだし。）

亨夜と零斗の持つ竹刀袋の中身、それを知る身の上としては、『警官等に見つからなければ大丈夫』等と考えてしまっている…それもそつだろつ、中に入っているのは完璧に銃刀法違反な一品なので…。

他の四人を気にせずには日魅子は持ってきた鍵を取り出し、プレハブの鍵を開け、引き戸を引き、中に入っていく。

「ダメよ、電気は点けないで、誰かが気付くかもしれないでしょ。」

「そうだぞ、盗みに入る時はその部屋に電気を点けないのは常識だ。指紋を残さない様に手袋を着けるのを忘れるな。それから誰かに聞かれたら不味い、足音や物音は絶対に立てるなよ。」

「………。」

零斗のセリフに無言で答える残りの三人、彼等の心に表れる言葉は一つ『お前、本当は泥棒やってんじゃないのか！？』だった。

三人は妙にその後の行動が手馴れている零斗を意図的に無視しながら、会話を続ける。

「ス、スリル満点だな。まるでルパン三世にでもなった気分だぜ。」

「あ、ああ…そうだな。」

「ああ…じゃあ、オレは五右衛門だな、刀も持っているし。」

亨夜は他の二人にも見える様に彼の持つ竹刀袋を少し上げて、二人に向かつて言葉を返す。九峪は入っている物の正体は竹刀か精々木刀だろうと考えているが、龍牙は彼の言葉の意味と中に入っている物の正体を知っているので無言のまま、呆れたような視線を亨夜に向けていた。

「あつた…」

他の四人の様子を無視して、何かを探す様に動いていた懐中電灯の光が在る一点で止まった。

懐中電灯の明りの中で一つの銅鏡が浮んでいる。昼間発掘された、今まで見た事の無い不思議な形をして、不思議な模様が刻まれた、あの銅鏡だ。

(…やつぱり、敵意はない…。むしろ…逆?)

明りの中に浮かんでいる、銅鏡を再び視界に納めると龍牙は自身の考えが間違いではなかった事を再確認する。

《…零斗、亨夜…二人とも、あの銅鏡…。》

《ああ、あの鏡には何か妙な《力》が宿っている。》

いつでも、竹刀袋の中身を取り出せる様に竹刀袋に手を掛けながら、亨夜は龍牙の言葉に答える。

《気をつける、何か起こる。》

亨夜と同じ様に竹刀袋に手を掛けて、零斗は注意深く銅鏡に視線を向けながら、二人に向かいそう呟く。

日魅子が手にしている懐中電灯の明かりは、銅鏡を照らしたまま、ぴくりとも動かない。

「それが見たかったのか？ だったら、明日にでも先生に頼んで見せてもらえばいいじゃねえか。」

日魅子は九峪の言葉には直接応えず、ただ一言だけ、

「持つて。」

とだけ言い、持っていた懐中電灯を九峪に押し付けてきた。

「なんだってんだよ、いったい!？」

懐中電灯を受け取った九峪がぶつぶつと文句を言っていると、日魅子は柵の銅鏡に手を伸ばす。

「お、おい、勝手に触ったりしたら…。」

「ッ!? 触るな!」

九峪と龍牙が慌てて止めようとした時には、すでに日魅子は両手で

銅鏡を持ち上げていた。

「し、しらねえぞ、オレは。」

「まずい…零斗、亨夜！」

九峪が緊張した声をもらしたのに対して、龍牙は多少慌てながら、後方にいる、二人に指示を出そうとして、名前を叫ぶ。

その時

かたん、と何かが揺れる音がした。飛び上がらんばかりに驚いた九峪が音のした方向に懷中電灯の明かりを向けるが何も無い。そのまま、建物中を照らしてみるが何も変わった所はない。

「ネ、ネズミでもいるのか……なあ。」

「上だ。」

零斗の言葉に従い、九峪が明かりを上に向けてみると、天井からぶら下がっている裸電球が揺れているのが見えた。

「え？」

「入口なら、間違いなく閉まっている…。オレやお前、龍牙が見逃しても、零斗なら見逃さないだろう…。」

入口を振り向こうとした九峪に向かい、やや緊張した様子で亨夜が

呟く。先ほどの言動と今までの行動から、何故かこういう事に手馴れている零斗なら見逃さないだろうと、その言葉に妙に納得してしまう。

（じゃあ、何で揺れている？ 風もないのになぜ揺れているんだ…。）

「おい、それ！」

九峪が嫌な予感がして、日魅子を見ると、彼女の持っている銅鏡が淡い光を放っている。龍牙の叫び声を聞いた時から、二人はすでに銅鏡に視線を向けていた。

「日魅子！ 変だぞ、それ！ おい、手を放せ！」

九峪の呼びかけに何の反応を見せず、ただ銅鏡を覗き込んでいる。九峪が彼女の肩を掴んだ瞬間。

「つつ！」

「くっ！」

「なに！？」

眩い閃光が周囲を包み、四人は目を瞑った。暫くして、光が薄れていくと龍牙を除く三人は目を開ける。

「大丈夫か？！」

ただ一人、偶然にも、所持していた『八咫の鏡』の効果により、閃

光から逃れた、龍牙は内心『ああ、こんな風にも役に立つんだな。』
と考えながら、光が薄らぎ他の三人に視線を移してしまった事でその瞬間を見逃してしまう。

四人が同時に再び、日魅子に視線を向けた瞬間、四人の表情が驚愕に染まる。そこには、不思議な柱が立っていたのだ。しかも、それだけではなく、その柱は、日魅子の体を飲み込んでいく。

「な、なんだ、ありゃ！」

(…前に先輩達から話に聞いた《刻の道》とか言う奴か?)

龍牙自身…イヤ、彼の義兄である龍麻でさえ見た事はない物だったが、それを見た瞬間、龍麻の仲間である他の宿星達の話进行し、直感的にその単語が頭の中に浮かんできたのだ

「日魅子！」

九峪は日魅子の体が光の柱に飲み込まれていくに連れて、薄れて来ているのに気が付き、彼女の名を叫ぶ。

『ヨウヤクアエタネ。』

男とも女ともつかない不思議な温かみを持つ声が、彼等の頭に響いた。

『サア、イコウ、キミノイルベキセカイへ…。』

「日魅子！」

「させるか！」

九峪と龍牙が飛ぶように動く、龍牙の振り下ろした手刀が日魅子の手から銅鏡を払い落とし、軽い掌打を当てて、日魅子突き飛ばす、九峪は突き飛ばされた日魅子が床に叩き付けられない様に受け止める。

龍牙はそれを確認し、優しく笑みを浮かべると銅鏡を刺す様に鋭い視線で睨みつけ、素早くリュックの中から鳥、竜、虎、亀の四体の獣が刻まれ手甲を取り出し、利き腕である右腕に取り付ける。

彼の脳裏に『過ぎ去った過去』の光景が浮かび上がる…守ると約束していたのに、助けることも出来ず、死なせてしまった仲間の一人であつた最愛の少女の死の瞬間が…。

「何が目的かは知らないが…。」

素早く氣を練り上げ、手甲を付けた右腕にそれを集中させる。僅かに残る冷静な部分で一般人二人の事を考え、不可視の技を選んでいくようだが、それでも全身から放たれる《氣》はプレハブ全体を揺らしている。

「お前の…勝手に…連れて行かせはしない…奪わせはしない!!!
大切な人を失うのは…オレだけで十分だ!!!!」

亨夜と零斗は龍牙の怒りを理解していた、練り上げた《氣》が半端な物ではない…彼が使おうとしている技、それは初伝、中伝の技の域を明らかに超えている、それは間違いなく奥義である《秘拳》クラスの技だ。《力》とは無関係な人間の存在を考えた場合に使う技としては妥当な物ではない。

その技を象徴するものは…

方位は西、季節は秋、色は白、イメージは雷。硬く鋭い鋼と轟く雷鳴。司る四神は西方の守護者《白虎》

徒手空拳技《陽》の中で《四神》を関する奥義の一つ《秘拳・白虎》

とても、それは無関係な人間の目の前で使うような技ではない。

「や、止める、龍牙！」

慌ててそれを制止しようと亨夜が叫ぶが彼の技の発動は止まらない。

「破アアアツッ！！！」

《雷氣》を纏い《金氣》を込め、硬質化させ、さらに手甲の中でも最強の黄龍甲に順ずる《力》を持った手甲『四神甲』を付けた右の

拳を…破壊神の振り下ろす鉄槌のごとき一撃を銅鏡に向かって振り下ろす、その銅鏡がどれ程の《力》を持っていようが、関係なく容易く砕く事が出来るだろう。

（間に合え！！！！）

同じ事を考えながら、《秘拳・白虎》を振り下ろそうとする龍牙を止めようと亨夜と零斗は走り出す。

絶対的な破壊の一撃が銅鏡へと向けられ、無情にも振り下ろされそうになった瞬間、緑の光の柱が広がり、龍牙と亨夜、零斗の三人を飲み込んだ。

後に残されたのは…

「き、消えちゃった。」

残された九峪の呟きが虚しく響いた…後に残されたのは気絶する日魅子を支える九峪の姿だけだった

東京某所…

月光に照らされながら、黒いコートを着て、両腕に黄金の龍を象った手甲を付け、前髪で目元を隠しながら、その前髪に隠された美形

と呼べる顔立ちが高貴さを醸し出している青年が自身を照らす月を見上げていた。

「…龍牙…。あの日から、止まっていたお前の宿星が動き出したか…。…負けるなよ…。」

優しく笑みを浮かべて、青年は後ろを振り向き、数体の《鬼》に視線を向ける。

「さーて、オレはお仕事と行きますか♪」

その青年、《緋勇 龍麻》は自身に襲い掛かる《鬼》達を眺めながら、楽しそうに笑いながら、そう言い放った。

「何が有ろうがお前が負けるか、お前は…このオレの義弟なんだからな！ 龍牙！…！」

彼の振るう、その拳は時として金色の槍となり、刀となり、眼前の敵を討つ。四神、五行の理さえも従える強大な《力》を持つ者、《黄龍の器》、《緋勇 龍麻》はその拳で鬼を倒しながら、義弟である龍牙への言葉を告げた…彼の義弟、《緋勇 龍牙》は仲間達と共に異界へと跳ぶ…その待つ運命とは…。

つづく…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2174b/>

火魅子伝～黄龍戦記～

2010年10月9日20時02分発行